Osaka University Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞アンドレ・マルチネ著『ステップから大洋へ：印欧語と「印欧人」』（その4：第VI-VIII章）
Author(s)	Martinet, André; 神山, 孝夫
Citation	大阪外国語大学論集. 1999, 20, p. 57-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79785
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

アンドレ・マルチネ著
『ステップから大洋へ——印欧語と「印欧人」——』

（その４：第Ⅵ－Ⅷ章）

神　山　孝　夫　訳

André Martinet:
Des steppes aux océans
— *L'indo-européen et les ≪Indo-Européens≫*—.
(Paris: Payot, 1987, 1994².)
(Quatrième partie: chapitres Ⅵ－Ⅷ)

Traduit par Takao KAMIYAMA

本稿は本誌第１７号(1997)p.63－95，１８号(1997)p.171－194，及び１９号(1998)p.33－80所収の同書翻訳「その１」、「その２」及び「その３」の続編を成す。訳稿作成の経緯等については「その２」及び「その３」の場合と大差ないが、今回は本学助教授藤平シルビイ、同木内良行の両氏にご教授賜った箇所がある。諸兄のご叱正を賜れれば幸甚である。

これは平成10年度文部省科学研究費補助金(基礎研究(B)(1))の成果の一部である。

略語表（補遺3）

Gaul.	ガリア（ゴール）語
Turk.	トルコ語
VL	俗ラテン語

第VI章
分岐，収束，及び親近関係

6.1　あらゆる言語は常に発達を続けている。これには様々な要因がある。そのうち最も重要なのは，社会の構造が時を経るに従って変化していくことである。すなわち，言い表すべき新たなものごとが生じたり，あるいは以前からあったものごとを違ったふうに表現することが必要になるのである。現代世界においては【交通・通信手段の発達によって，体感される】距離が短縮されたため，異なる文化間の交流はますます頻繁に，密接になってきており，このように社会が常に変化していることが実感されることもあまりないのかもしれないが，その変化を意識する必要もあまりない。このような変化は実際新たな要求に応えることから生じている場合が多い。そのため，変化によって諍いが生まれることはなく，変化は普通気付かぬうちに起きる。今流通しているこれこれの果物は20年前には市場に出回っていなかったとか，これこれの服のデザインはもう時代遅れだとか，これこれの世界観はもう通用しないとか，世界が変化したことを意識するのは，以前を振り返ってみる折にほぼ限られている。今日寿命が非常に延びているために，このような回顧が行われやすくなっている。もっとも，昔から言われる【Lat.】laudātor temporis actī【過去の擁護者】という言い方にも現れているように，このような昔を振り返ることはいつの時代にも行われるものである。

6.2　現代文化が変化しやすいものであることを意識すれば，言語がそれに影響を受けることが自動的にわかるというわけではない。すたれていく語も文学作品の中では生きているものなので，その言語を使っている人々は語彙が移り変わって行くことなど感じないものである。【フランス語で】果物の avocatier「アヴォカド」や magret de canard「鴨のささみ」，anorak「アノラック」や sicav「変動資本投資会社」といった語が用いられるようになったのは比較的最近のことだが，そのことにはたと気付いたとしても，だからといってこのような新語が伝統的な語彙の牙城を崩すものだとは感じられないものである。たとえ新たな語彙が流入していることに注意を向けたとしても，人々の反応は結局のところかなり健全であって，そんなつまらないことでは言語の根幹，つまり発音や文法，あるいは基礎的語彙には影響は及ばない，と考えるであろうことはまず間違いない。とはいえ，今自分の話していることばをじっくりと嚙みしめてみて，まるでまだ1900年当時のような，つまり二つの世界大戦も経験せず，それ以来培われた様々な変化，物資，知性，モラルもまだなかった当時のようなつもりになってみれば，二言口に出すうちの一言がもう理解できないとわかることであろう。

6.3　だが，これは特に今世紀について言えることであり，また，いわば揺れ動いている社会の傍らに「原始的」な社会，すなわち今日でもなお石器時代と変わらない社会も存在している。確かに，言語発達のペースは世界の発達を反映する形で生じるため場合によってまちまちであり，現代において我々が身を置く国内及び国家間の複合体では速く，等質性が高く閉鎖的な個々の小

さな社会でははるかにゆっくりとしていると考えられる。しかし，接触が全くなくとも言語が発達する可能性はある。言語とは，コミュニケーションの諸要請，伝統の諸要求が永遠に争いを続け，変化を歓迎しない要素と変化を求める要素とが対立を繰り広げる場面だとも言い得る。個人レベルで言えば，発音器官の均整が取れていない点が変化を促す一因となっている。何しろこれはもともと【食物摂取と呼吸という】他の要求を満たすようにできているのである。

顎の骨の役割

6.4　言語は，その最も基礎的なレベル，すなわちその音のレベルにおいて不安定である。その恒常的な原因を最もよく示しているのは，音を発する際の顎の骨の役割である。あらゆる言語には母音が必ずあるが，これは単に声帯の振動によって生じる音が口腔内で反響したものに過ぎない。個々の母音の差異を生み出しているのは口腔の取る形状である。その形状を決定しているのは，口腔内の諸器官のはたらき，すなわち舌の前後の位置，唇の形状，口蓋帆の上げ下げばかりではない。下顎の下げの程度もまた大きな役割を負っており，これによって開口度が決定される。開口度は[a]では大きく，[i]や[u](フランス語の ou)では小さく，[e](フランス語の é や è)や[o]では中程度である。下顎は厳密に上から下へと動いて口が開くわけではなく，顎の関節を支点として回転運動を行うわけで，そのため開口度の角度が一定の場合，後部におけるよりも前部におけるほうが上下の顎の間隔は広くなる。他方，様々な言語の母音体系を観察すると，顎の同じ角度を用いる傾向が見られ，舌は口腔内の前部あるいは後部のどちらかに集中しやすいことが明らかとなる。

6.5　ある言語において前舌の位置で三つの開口度が区別され，したがって/a/(patte の母音)と/e/(clé の母音)及び/i/が区別されるならば，後舌の位置でも三つの開口度が区別されて，/ɑ/(pâte の母音)と/o/(clos の母音)と/u/(clou の母音)とが区別され得る。前舌で四つの開口度を持ち，/a/，/ɛ/(フランス語のè)，/e/(フランス語のé)[1]と/i/を区別する言語の場合には，後舌でも顎の同じ角度が使われて，/ɑ/，/ɔ/(フランス語の sotte)，/o/(フランス語の saute)と/u/(フランス語のou)が区別されると期待される。これは現代フランス語，イタリア語，デンマーク語等で確認される母音体系である。これら三言語のように，前舌母音のうちの二つの区別があまり厳密とは言えない言語においては，後舌の同じ開口度を持つ母音の区別も厳密でない。例えばフランス語の antérieur，exact，quai，gai 等では é【=[e]】が用いられる場合も è【=[ɛ]】が用いられる場合もあり，同様に後舌でも[ɔ]と[o]の区別が曖昧になっている。また，前舌に二重母音があるなら，すなわち例えば英語の pale の[e^i]のように調音の途中で開口度が変化するのなら，同様に後舌においても pole の[o^u]のように二重母音が生ずる傾向が認められる。

6.6　しかし，発音器官の形状からして，様々な音を発するのに取られる口の構えの隔たりと，その結果として生じる音色の差異は，後舌の場合のほうが小さくなる。そのため，多くの言語において，前舌に弁別的な母音が一つ多いことがある。例えば南部のドイツ語では Segen「祝

福」[2]と sägen「のこぎりを引く」とが区別され，前舌の長母音に/ε:/，/e:/，/i:/の三母音があるのに，後舌にあるのは/o:/，/u:/の二つだけで，/a:/は中間的な性質を持っている。フランス語でも18世紀まで前舌には長い é【=[e:]】(idée)，短い é【=[e]】(dé)，長い ê【=[ε:]】(être)と短い è【=[ε]】(mettre)の区別がされたのに，後舌で区別されたのは長い ô(saute)と短い o(sotte)だけであった。このように様々な母音体系の変遷を調べてみると，前舌と後舌の比率は 4 対 3 とは言わないまでも，4 対 3 と 3 対 3 の間であって，これが不安定の常なる原因なのである。少々幼稚な言い方をすれば，前舌母音に四つは多すぎるが，三つでは足りないのである。ここ三世紀の間にフランス語の母音の辿った歴史は，前舌の四つの開口度を後舌の系列にも広げたために生じたものであって，その結果，長い ô と短い o との対立が狭い ô と広い o の対立に移行し，前後の比率は 4 対 4 となった。北部のドイツ語においては sägen と Segen の区別が失われており，前後の母音数の比率は 4 対 3 から 3 対 3 になった。

文法の不安定さ

6.7　別な面においても不安定さを生む同様な原因が見受けられる。ある言語で現在形と過去形が区別される場合，未来形も区別されるだろうと考えても不思議はないことであるし，確かに言語の発達を長期にわたって追ってみればその通りかもしれない。しかしこれは少々短絡的な論理であり，感覚(réalité psychologique)とは大きく食い違っている。感覚に従えば，経験された過去のことならうまい具合に，また充分客観的に言い表すことができるが，これから行われる出来事を言い表すことは不完全であり，義務や意志あるいは願望の見地からこれを表現することもしばしば行われている。したがって，純粋に未来のことが表現されるのは過去の場合に比べてずっとまれで，未来形がある場合でも，その体系は過去形の場合よりも貧弱なのが普通であり，このことは検証すれば確認される。例えばフランス語では過去形で il fut【単純過去】と il était【半過去】の区別があるが，未来形には sera の一つの形しかない。一方にはパラダイムを拡充しようとする傾向が見られ，例えば il a fait【のような複合過去】を敷衍して，動詞 avoir のすべての時制形態と法形態が過去分詞と結びつくようになったり，あるいは英語の to be のすべての時制形態と法形態が-ing に終わる形と結びつくようになったりといった現象が生じているが，他方では言語コミュニケーションの要請にあまり合わないところまで拡大するのは避けようとする傾向もあり，この二つの傾向は常に争いを繰り広げていると言えよう。

内的な条件付け

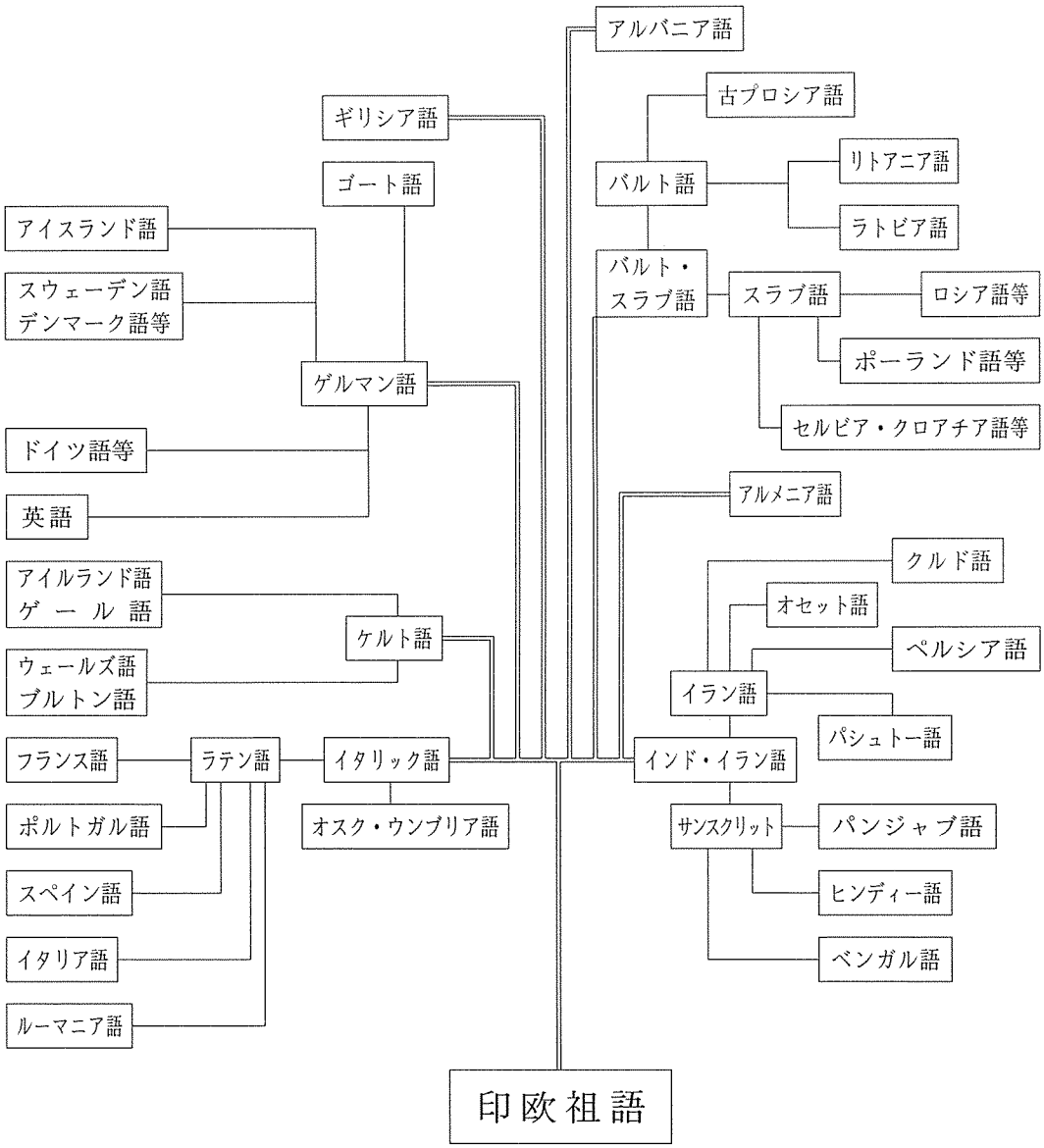
6.8　上で述べたことから重要な示唆が得られる。すなわち，言語の発達を司るのは満たされるべきコミュニケーション上の新たな要請が出現することばかりではなく，発達の中の一定の段階において言語体系の性質そのものがその方向性を大きく左右して行くという点である。例えば，現在形と過去形を区別する言語では，この区別を行わない言語よりも，未来形が作り出される可

能性が大きい。また，帯気音のp(/pʰ/)と無気音のpとが区別される言語では，この区別がtやkについても行われるようになる可能性がある。なぜならこの言語の話者は口腔内での閉鎖(例えば[t])と声門を開いた調音，すなわち[h]とを同時に行う術をすでに心得ているからである。これから言い得ることに，ある民族が移民を行うことによって多くの枝葉に分かれ，枝葉どうしの接触が失われた場合，すべての枝葉【の言語】において当初は並行した発達が行われることが予想され，それらの個々の枝葉が異なる影響を受けた場合であっても，ある程度の並行性が継続して現れ得るのである。有史以前の【言語分岐の】プロセスが生じた時期を定めようとするならば，【物理的な民族の】分裂が生じた途端に，【言語的にも】分岐が生じ，個々の言語の発達がその時点から開始されたなどとみなしてはならない。例えば，ロマンス語を比較することによって原初ロマンス語の再建，すなわちラテン語から生じたこれら諸言語が呈する相違をすべて考慮の対象から外した言語の再建が試みられたことがあった。この作業の結果得られたのは，ラテン語とは似ても似つかぬものであった。これらの言語【の分岐】が同一の方向に発達することから始まったからである。例えば，ルーマニア語，イタリア語，フランス語，スペイン語及びポルトガル語を取り上げ，比較によって【F】cent「100」にあたる語を再建すれば，その結果得られるのはラテン語のcentum[ˈkentum]ではなく，イタリア語の形態[ˈtšento]に類するものとなろう。

分岐と「系統樹」

6.9　言語学者と言えば比較言語学者を指すのが長い間普通であったが，彼らは言語発達を分岐という観点からのみ捉えていた。ある言語がある民族に話されたとしてみよう。この民族から多くの異なる民族が分かれ出る。これら諸民族各々の言語は独自のリズム，独自の方法によって発達する。後に今度はその中の一つの言語が複数の言語に分かれ，さらにそれらの言語もまた同じことを繰り返す。この一連の現象は系統樹の形で図示することができる。その場合の木の幹はおおもとの言語であって，そこから一定数の枝が分かれ出ており，これらの枝ひとつひとつが言語に対応する。これらの言語もまた特定の言語に分かれ，以降また同じことが繰り返される。印欧語を当てはめれば，幹が表すのは【印欧】祖語である。初めにその幹を二股に分けて，一方にケントゥム語群を，もう一方にサタム語群を配置することができよう。ケントゥム語群の大枝はやがてヘレニック語派，イタリック語派，ケルト語派，ゲルマン語派の枝に分かれる。その最後のゲルマン語派の枝を例に取ると，ここから東方語群，北方語群，西方語群の三つの小枝が出ている。その最後の小枝は二つに分かれていて，一方はドイツ語，もう一方はアングロ・フリジア語であり，その後者はフリジア語と英語に分かれている。英語はさらに南部と西部のケント方言，ウェスト・サクソン方言群，及びマーシア方言とノーサンブリア方言に分かれる。さらに付け加えるなら，若干のゆれはあるものの，これらのうちのマーシア方言が中世及び現代の英語として重んじられている点を指摘しておくべきだろう。しかし，ドイツ語でStammbaumと呼ばれる系統樹が一世を風靡していた当時、このような【＝マーシア方言以外の方言の】衰退については

ほとんど注意が向けられていなかったことも指摘しなければならない。その後発見されることになるトカラ語とヒッタイト語が上では言及されていないことに気付かれることであろう。系統樹という少々単純化し過ぎた捉え方はその後時代遅れとなったのである。



原図１２　系統樹

この系統樹は１９世紀終わり頃の知識及び当時認められていた一般的見解を反映したものである。ここではトカラ語もヒッタイト語も考慮に加えられていない。「等」と記されている場合は，例えばオランダ語やチェコ語のようにスペースの関係で書ききれなかった言語があることが示されている。

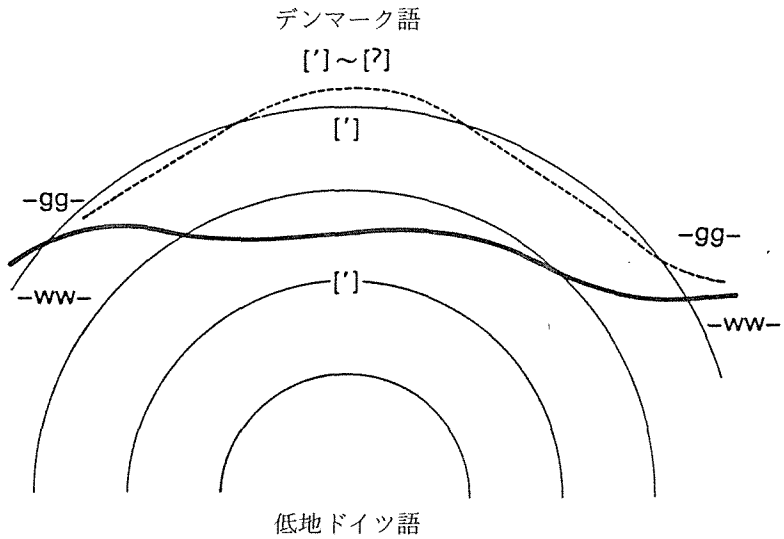
波紋説

6.10　１９世紀の終わり頃に波紋説と呼ばれる新たな理論が登場した。これは系統樹に完全に取って代わることはないにせよ，少なくともその不備を補うものであった。言語変化とは，ある言語が話される場所の一地点で何らかの改新が生じ，それがそこから少しづつ広がって行くことから起こるものであり，その様は，水に小石を落とすと，その場所を中心としてそこから波が水面に広がって行くのに似ている。視点が変わったことに気付かれよう。想定されているのはもはや，故郷を離れ，未開の荒野に分け入る入植団ではない。この説が扱うのはある言語が話される連続した領域である。その中の複数の地点を中心に方言分化が開始され，それに異なる改新が次々に加われば，ついには全く別の方言(idiomes)ともなり得る。同じ場所から複数の改新が生じ，そこから生まれる波がほとんど同じ地点に止まれば，言語の境界線が生じることになる。すなわち，多くの改新が行われた結果，住民どうしが相互理解に困難を感じるようになるのである。この過程が長く続けば，全く理解ができなくなり，その結果異なる二つの言語が生じることとなる。

6.11　この理論が出現したのは，ちょうど方言に対する関心が増した時期のことであった。すなわち，系統樹にその名が登場するような大言語も初めから大言語だったわけではなく，政治的，経済的，あるいは文化的な拡大によって，雑多な要素の混在する領域が言語の面で均質化され，大言語が生まれたことが意識された時期である。例えばフランス語も最初はパリで話される地方語(vernaculaire)に過ぎなかったが，軍隊の影響や，商人や詩人に好んで用いられたことから，これが数世紀の間に次第に勢力を拡大したのである。その過程はパリ周辺の住民がパリ風のことばを用いだしたのに始まり，後には首都から離れるに連れて共通・公用語として学ばれるようになった。ただしそれと同時に，遠方においてはオイル語，オック語，カタロニア語，バスク語，ブルトン語，フラマン語，アルザス語といった地方語もしばらくは保たれていた。

収束

6.12　当然ながら，上に記したフランス語のケースが，紀元前第三あるいは第二千年紀の印欧語にあらゆる点でそのまま当てはまるわけではない。しかし，そこで得られる収束の概念は採用してよかろう。すなわち，言語の収束とはコミュニケーションを円滑化すべく自分のことばを相手のことばに近づけることから，あるいはコミュニケーションを円滑化する最良の方法が相手の言語を学ぶことだと納得することからはじまると考えられる。収束が行われても，それと同時に共同体のあらゆる話題にその影響が及ばないと，事実上分岐が生じかねないことは承知しておく必要がある。収束によってある方言が別の方言に近づけば，この接近に関わりを持たないその他の近隣方言とは分化が行われ得る。



原図１３　波紋説

民族移動の結果，-ww-を-gg-に転じた民族と，-ww-を保存した民族という二つの異なる「枝」のゲルマン人が接触することとなった。低地ドイツ語には[′]と記される一種類のアクセントしかないが，デンマーク語にはmor「母親」[mo′ʁ]とmord「殺人」[moʔʁ]に見られるごとく[′]と[ʔ]という二種類のアクセントの対立があり，後者は小さな咳によって特徴づけられる。デンマーク語の領域の一部は低地ドイツ語の影響を受けて，これら二つのアクセントの対立を失い，[′]のみを持つに至っている。

6.13　一つの言語を全くきれいさっぱり捨ててしまって別な言語に乗り換えることにまでは至らないという場合もあるが，このような非常に微妙な形の収束の重要性が現代の研究によって明らかとなった。イタリア人研究者は一般にラテン語とイタリア中部のその他の印欧語との関係について次のような見解を採っている。すなわち，これらの言語がよく似ているのは，古くからこの地域が一つの共同体を形成していたからではなく，半島内で接触が行われたからだとするのであるが，上記の理由から，印欧語に関わる諸現象においてあらゆるデータを細かく検証せずにこの見解を退けるわけにはいかない。上ではこれとは異なる立場を取り，有声帯気音と呼ばれる音素が無声帯気音に転じた言語状態から出発して，これらすべての言語の子音体系が完全に説明される点に重きを置いた。この立場は，収束が生じた可能性を全く排除するものではない。ただし，このような収束が起こったとすれば，それは上記の諸民族がイタリアに到来する以前に，中部ヨー

ロッパの一帯，例えばドナウ平原で生じたと考えねばならない。ケルト語やゲルマン語でｂｄ等の有声音で現れる音【＝祖語の有声帯気音】を，ある時代にこの地で行われていた印欧語の諸方言は，一斉にph th等の無声帯気音へ変化させたのである。この系列の音素を通常の表記法に従って，すなわち例えば唇音については*b^hのように表すとすると，それ以前に行われたことは次のように略述できよう。すなわち，ケルト語やゲルマン語のような北寄りに行われていた印欧語諸方言では気音が失われ，bや[β]が生じ，他方，問題のヨーロッパ中部地帯では気音は保存されたものの閉鎖音が無声となって*ph等が生じたのである。この*phは古典ギリシア語では保存され，さらに[f]に転じたのは後のことであったが，イタリアに押し寄せることとなる人々のもとではこの発達は古い時代に行われていた。印欧祖語のいわゆる「有声帯気音」の性質に絡む難点については，以下【9.83ff.】で詳述する。

ウェネト人

6.14　紀元前第三あるいは第二千年紀に一つであった民族が，後にはヨーロッパ亜大陸内の別々の三つの地域に現れ，その各々の言語は印欧語の別々の語派に属すという場合もある。ウェネト人のケースがまさにそれに当たる。

6.15　今日のヴェニス（ヴェネツィア）を中心とするヴェネト地方には，紀元前数世紀にウェネト人(Lat. Venetī)がおり，若干の碑文によりその言語が知られている。綿密な調査の結果，その言語は中部イタリアの印欧諸語，特にラテン語と近い関係にあることがわかっている。

6.16　他方，カエサルがガリア征服に赴いた折，アレモリカの今日のヴァンヌ地方に当たる場所で，彼はやはりウェネト人(同じくLat. Venetī)の名を持つ民族に遭遇している。この民族がガリアの都市連合に帰属していたことを疑う者はいない。ローマ人にウェネティアと呼ばれたこの地域において、今日ではブルトン語の一方言に数えられるヴァンヌ語が話されている【Cf.5.88】。大ブリテン島から到来したアレモリカの他の方言とは異なり，ヴァンヌ語は今日のフランスの地におけるガリア語の末裔であるとも考えられる。このように，大西洋岸のウェネト人がケルト人に属することは確実である。

6.17　また，スイスの北東部にあるコンスタンス【＝ボーデン】湖の一部は，古代にはVenetus Lacus【ウェネトの湖】の名で呼ばれており，かつてここにVenetīという名の人々がいたと考えられる。もっとも，彼らがガリアのウェネト人，あるいはイタリアのウェネト人と関係があるのかどうかは不明である。

6.18　【カエサルのガリア遠征の】八世紀後，ゲルマン語に【O】HG Winida，OE Winedasの形が現れ，これらはLat. Venetī[weneti:]と規則的に対応している。これらの形態が表したのは，当時ポメラニアからメクレンブルクにかけての北部ヨーロッパ平原に居住していたスラブ人である。この語はヴェンド人(Wendes【G Wenden】)の形で今日まで残っており，ドイツではベルリン南東のシュプレーヴァルト地方に住むスラブ語を話す住民を指す。彼らは自らをソル

ブ人(Sorabes)と称している[3]。また，オーストリアにはwindischという形容詞【及び民族名Winde】があり，これはもともとスラブ語【スロベニア語】を話す住民が住んでいた地域【ケルンテン】を表す際に用いられる[4]。

6.19　結局同じ語がイタリック人，ケルト人及びスラブ人を表していることになるが，このような語が存在していることからどんな結論を導くべきであろうか。これらが単なる同音異義語であると考えることは正しいとは思えない。印欧語の形態でeが二音節連続して現れるなどあまり普通のことでないだけに，ますますもってこれらの形態が偶然に一致することなど不可思議となる。したがって，ウェネト人という単一民族がかつて存在していたと考えてよかろう。OE Winedasに文証されるように，これはもともと[wenet-]に複数主格の語尾 ōs を加えた形であって，この語尾がケルト語とラテン語で-ī に置き換えられたと考えられる【Cf. 6.24】。この名の語根はwen-であろう。これは【F】Vénus, G Wunsch, E wish「願望」, Dan. ven「友人」やSw. vän「友人，魅力的な」にも見られる，よく知られた語根である。そうするとこの名称の原義は「愛すべき人々」だと考えてよさそうに思える。仮にウェネト人がこのような意味を込めて自らを称したとすれば，このようなよい印象を近隣族も持っていたと信じたいところである。だが，印欧語を話す諸部族が自分達の能力や武力を誇示しないで，周りに媚びを売っていたなどとは考えにくい。もう一つの案として，このwen-という語根が「獲得する，征服する」の意味であったと考えることもできよう[5]。ウェネト人は紀元前第三千年紀の終わり，あるいは第二千年紀の初め頃，北部ヨーロッパ平原のバルト海とボヘミア山地の間あたり，あるいはその若干東か西に居住していたと思われる。その想定される時期に彼らは言語的にある程度独立していたが，近隣に居住する印欧語を話す諸部族との相互理解は可能であったと考えられる。

6.20　ある時点において，彼らのうち西寄りに居住していた一派が，後にケルト人となる近隣族との関係を密にした。この一派の言語ではケルト語と同様に*pが弱まり，ついにはh-となった。この状態は*perkʷus「オーク」に由来するヘルキーニアの森[6]という地名に残されている。ケルト人が西進を開始したとき彼らもそれに従い，ついには両者は一体化してしまったのである。

6.21　ウェネト人の別の一派は他部族とともに南下し，しばらくの間ドナウ川流域に留まった。ここに滞在していたときに，彼らはイタリック人とギリシア人から無声帯気音を得たと考えられる【Cf. 6.13】。

6.22　残りのウェネト人はもとの場所に留まった。その一部は北から到来した圧力に屈してその民族的独自性を失い，ゲルマン化した可能性もある。しかし彼らは数多く残り，結果的にゲルマン人のことばで「ヴェンド人」という名が東の近隣族一般を表すようになった。すでに述べたように【2.11】，ゲルマン人はこれと同じようなやり方で，彼らと接触のあったケルト人部族の名であるウォルカエを南西の近隣族一般の呼称として用いていた。ゲルマン人の東の近隣族はその後の紀元後5世紀近くになってスラブ人の波に覆われることになる。その時には西方のケントゥム語群とサタム語たるスラブ語が分かれてから二千年以上が経過しており，自分達の言語を侵略

者たるスラブ人の言語に少しづつ近づけることなどほとんど不可能であって，前者は淘汰されたと考えられる。この言語を異民族が受け入れたとおぼしき痕跡が，一部の西スラブ方言に見られる。一例を挙げると，他のスラブ語が鼻母音あるいは鼻音性を失った母音を持つ位置で，ポーランド語は「母音＋鼻子音」の結合を示している(7)。「歯」は古代教会スラブ語では ząbŭ(概略的な発音は[zõbə])であり，ロシア語とセルビア・クロアチア語では zub，スロベニア語では zôb，ブルガリア語では zəb となっているのに，ポーランド語【ząb】は[zɔmp]と発音されるのである。南フランス人は【パリ風の】フランス語を学ぶ必要が生じた折に canton【[kɑ̃tɔ̃]】を can'tong【[kantoŋ]】のように発音したものだが，上記の現象はこれによく似ている。

6.23　ゲルマン人は，大移動の以前も以降も，ことばの通じない近隣族をヴェンド人と呼んだ。同様にして，英語では【ウォルカエに由来する】Welsh がウェールズのケルト語を話す民を表しているし，ドイツ語の Welsch は今日ではスイスのロマンス語を話す民について用いられている【Cf.2.11】。これは，スラブ人がドイツ人のことを「おし」，すなわちことばの通じない人々と呼んでいるのに通じる現象である(8)。

ゲルマン語，ケルト語，イタリック語

6.24　ウェネト人のケースからすると，往時においてゲルマン人，ケルト人，イタリック人は相互に密な関係を持っていたと考えられる。フランスの比較言語学では，フランスの歴史にも関わるため，イタリック語とケルト語の比較が盛んに行われた。実際，これら二つの語派には共通する改新が行われている。例えば，-(o)s，-(e)sに終わる単数属格形は，幹母音-o-を持つ語の場合，単数主格の-osと同音となってしまう点が少々問題であった。この問題の解決法は語派によって様々であるが，イタリック語とケルト語は同じ方法を取り，この場合-os，-esを-īに置き換えている【cf.6.19】。また，非常に印象的なことに，イタリック語もケルト語も全く同じように各々の方言が二つに大別され，語頭で*k^wを保存する方言と，これをpで置き換える方言とに分かれる。「4」を例に取ると，Lat. quattuor や【O】Ir. cethir【ModIr.ceathair /k^jahər^j/】では qu-あるいは c-が現れ，Osc. petora や W pedwar では p-が現れている。同様に，疑問詞の場合にはLat. quis や【O】Ir. cía【ModIr. cé/k^je:/】に対して，Osc. pis，W pwy である。一方，ケルト語とゲルマン語，及びイタリック語とゲルマン語の間にもこのような類似性がないでもない。上【5.55】で述べたように，ラテン語には lupus「狼」と bōs「牛」のように，-qu-，u-が予想される位置で-p-，b-が現れる例外的な場合があるが，ゲルマン語にもこれと同じような例外的ケースがある。ゴート語の関係・疑問詞 h^was(Lat. quis)や ah^{w}a「川」(Lat. aqua「水」)に見られるように，*k^wに対しゲルマン語で規則的に対応するのは h^wであるが，ゴート語の「4」は fidwor，「狼」は wulf であって，何れも例外的に f が現れているのである。

6.25　ケルト語とゲルマン語の関係には特別な扱いが必要である。起源的に古くは同じ統一体に属していたことを示すような共通の特徴は色々あるが，それ以外にもゲルマン語がケルト語から

借用した一連の語があり，この借用が行われたのは比較的新しい時代であって，その時には両言語の差異がかなり大きかったため，借用関係が容易に判定できるのである。まず初めに社会構造に関する語彙がある。Goth. reiks は[ri:ks]と発音され，「長」あるいは「富」を表し，その派生語 reiki は長の領地や後には国家や帝国(G Reich)を意味したが，これらがその例に当たる。その本来の形態は Lat. rēx「王」，複数 rēgēs にも見える【Cf. 4.12】。印欧諸語の中で長い ē を規則的に長い ī に変えたのはケルト語だけである(9)。ライン川はラテン名 Rhēnum であるが，フランス語とドイツ語ではそれぞれ le Rhin，der Rhein であって，ここにケルト語の古い ī が現れている。ビトゥリーゲース(【Lat.＜Gaul.】Biturīgēs)の原義は「世界の王達」である(10)。ラテン語では-ī-の部分にアクセントが置かれるため，ここから【フランスの旧】州の名であるベリ(Berry)が出ている。他方ガリア語では-u-の部分にアクセントがあり(11)，ここからその州都であるブールジュ(Bourges)の名が生まれた。言わずもがなではあるが，ウェルキンゲトリクス(Vercingétorix)というのは「戦士の最高司令官」ということであって，これは人名ではなく肩書きと思われる【Cf. 3.11】。もう一つ，ガリア語からラテン語に取り入れられた ambactus という興味深い語があり，これは下僕を意味していた。これが古高ドイツ語に ambaht の形で受け入れられ，弱化を被った結果，ここから公的な職務を意味する現代ドイツ語のAmtや，公務員を表す Beamter が生まれている。この語は何世紀も経る間に価値を失ったどころか，同じ意味であった Lat. minister よりも高い地位を獲得することになった。minister は早々と聖職者や君主に仕える者の意味に限局されてしまったのである。この ambactus がもとになって【F】ambassade「大使館」や ambassadeur「大使」が作られている。この語には初期の段階から好ましいニュアンスが備わっていたことが窺われる。

6.26　全く別の，技術の分野について言うと，E leather や G Leder「革」はケルト語からの借用語なのかもしれない。OIr. lethar【ModIr. leathar/ljáhər/】や W lledr は，Lat. pellis「皮，革」【＜*pel-nis】と同じ語根から，規則的に p が脱落して派生したともみなせる。つまり，初原的な語根は*pel-【*は神山】であり，これは例えば英語のfilm（∵p-＞f-）にも見られるが，これが規則的に ple-と交替し，さらに接尾辞-tro-が加わって作られたとも考えられるのである。

6.27　ゲルマン人はケルト人から言語の発達史上の複数の段階で鉄の名称を借用しているが，この点については原著p.255【第XI章】を参照のこと。

6.28　ケルト人とゲルマン人とは古代において疎遠であったと考えられてきたが，上記のような借用が行われた可能性があるからには，その疎遠な時期を経た後に両者は関係を樹立したのだと考えられる。初期の印欧語諸方言は別々の語派へと発達して行くことになるわけだが，これらの諸方言が紀元前第三千年紀にはどのような関係にあったかを，当然ながら，あまりに簡略化して把握するのは得策でない。従来の見解では，後の時代に占めることになる位置を根拠にして，この時代にイタリック人は南に，ケルト人は中央に，ゲルマン人は北に，そして恐らくウェネト人を含むその他の民族はそれらの東に位置していたと考えられてきた。だが，落ちついて考えて戴

きたい。ゲルマン人が他の同族諸民族と真の意味で分岐する契機となったのはその子音推移であるが，この子音推移が開始されたのはその二千年後のことなのである。一例のみを記すと，後に E father, G Vater,【O】Ir. athir【ModIr. athair/áhərʲ/】, F père, It. padre のようになって行く単語は，問題の時代には方言の別なくおしなべて patēr のように発音されていた可能性が高いのである。これはペリクレスの頃にアテーナイで行われていた発音に近いものと思われる。

訳註

（1）原著初版，二版ともこの部分に誤植があったが訂正した。

（2）原著では動詞と誤認されている。

（3）本当の自称はセルブ人。またその居住地名は Serbja である。バルカンのセルビアとの混同を避けるため恐らくドイツ語での別名 Sorben を基にソルブ人と称するのが一般的である。Mareš(1996)に添えた訳註13等を参照されたい。

（4）venetī あるいはそのゲルマン語訛である venedī は西暦1世紀以来プリニウス，タキトゥス，プトレマイオス，6世紀にはゴート人ヨルダネス等の著作に登場し，スラブ人を表すと考えられるが，森安(1986: 36ff.)の記すように彼らとヴェネツィアとの関係等が大きな疑問であった。6.14−6.23に記される原著者の見解は実に斬新で，これを採ればこの点やポーランド語などのいわゆるレッヒ語群の特異性についての疑問が氷解するようにも思える。

（5）“to desire, strive for”(Watkins 76). Cf. 蛭沼(1988).

（6）Lat. Hercȳnia silva. ヘルキューニア，あるいはヘルシニアとも。ドイツ中南部の森林山岳地帯の総称。

（7）何らかの誤解があるようにも思える。ここに言う「母音＋鼻子音」の結合は一般に概略的に鼻母音と称され，また音韻論的にはそう呼んで差し支えない。だが，実際に必ず鼻母音が発される場合は摩擦音の前に限られ，ここに上げられた例のように閉鎖音が後続する場合にはその閉鎖音と同器官的な鼻音化閉鎖音を伴う。これは日本語の撥音（ん）の具現と酷似している。神山(1995:138,166)を参照。

（8）例えば R немец「ドイツ人」は нем(ой)「無言の」と-ец「人」に分析される。他方，スラブ人は自らを slovo「ことば」に由来する*slovenъ「ことばを話す人」と呼んだと考えられている。R slavjane 等は通俗語源により slava「誉れ」と結びついた結果と一般に説かれる。

（9）Cf. e.g. Lewis-Pedersen(1937:7).

（10）紀元前600年頃隆盛を誇ったガリアのケルト部族。紀元前52年、ついにカエサルに屈しローマに併合された。近山金次訳のカエサル『ガリア戦記』では「ビートゥリゲース」，泉井久之助訳のタキトゥス『ゲルマーニア』では「ビトゥリゲース」とされるが，長音節は原著者及びMengeに従った。前要素のBitu-は IE *gʷei-“to live”のゼロ階梯に接尾辞を加えた*gʷi-tu-に起因するとされる(Lewis-Pedersen 1937: 4)。後要素の-rīgēs は同じく『ガリア戦記』に見える Caturīgēs 等にも現れている。近山訳の「カトゥリゲース」も「カトゥリーゲース」に訂正されるべきであろう。Meillet(1977: 243f.)を参照されたい。

（11）Cf. e.g. Lewis-Pedersen(1937:68f.).ただしその拠り所とする Meyer-Lübke の論文は未見につき詳細は不明。

第Ⅶ章
比較と再建

7.1　比較が行われるようになる以前の背景を初めから綴ることは叶わないにせよ，少なくとも比較言語学の誕生を遅らせることになった誤解を解いておいたほうがよかろう。比較言語学が誕生したのは，西洋にサンスクリットの存在が知られ，西洋の古典語であるギリシア語及びラテン語とこの言語との明らかな類似が偶然の所産ではありえないとの確信が得られたときであったとされている(1)。だが，インドの文化との密な関係ができあがるずっと以前にも，好奇心に満ちたヨーロッパ人が，当時知られていた言語間の類似を取り上げないはずがなかったのも明らかである。あまり詳しくは述べないが，例えばフランス語の père，mère，frère と英語の father，mother，brother のような，もっとも基本的な親族名称は明らかに対応しており，この問題に関心を抱く者なら誰でもこの対応に刺激を受けたはずである。ただし，実際に比較研究を行うにあたって，これらの語はそれが指す事物あるいは存在とは一致しない(2)ということをまず認識する必要があった。上に記した語のような明白な対応を目の当たりにして人々の最初の反応は，この対応を解明しようとするわけではなく，これらの語が表す【指示対象との】関係が様々な社会で同じなのだから，似たような語が用いられるのも至極当然だ，といったものだったのである。それどころか，これらの語が互いにもっと似ていたとしても，あるいはさらに全く同じであったとしても驚かなかったことだろう。バベルの塔の神話が語るのはこのような反応に対する一つの反論である。近年，あらゆる言語は，純粋に表層的な相違を越えたレベルでは，同一のモデルに則って作られているとする説(3)が現代の大衆に人気を博したが，これも知覚される現実と言語とを一致させたいという欲求が人間にはいつの時代にもあることを示す一例である。このような欲求を口にしたくなるものなのだろう。

7.2　père，mère，frère，father，mother，brother のような対応があることの意味付けが行われるようになったのは，ヨーロッパの発展の過程でこのような対応を全く持たない言語に遭遇してからのことであり，当初このような言語はいわばけしからぬ言語だと感じられた。このように古来の見解を脱する第一歩が踏み出されると，その次には，空間的にも時間的にも離れれば離れるほど差異が大きくなるのではないかと考えられた。そのため，中国語がラテン語と根本的に異なるのも驚くに値しなかった。何しろ，中国語は地球の反対側にあるのだし，二千年もの間両者は接触を持たなかったのだからというわけである。しかし，遙かなるインドの地において，上記の例に対応する pitā(r)，mātā(r)，bhrātā(r)が三つとも見いだされたことが，注目を集めないわけはなかった。そして疑問が生まれた。なぜこれほど類似した言語がこれほど離れているのだろうか。どちらが移動したのだろうか。ヨーロッパ人がアジアを出て西に移動したのだろうか，それともインド人がヨーロッパから東に向かったのか，のようにである。このような疑問に対する反応に影響を被ったのは，当時知られていた世界の先史一般であった。

7.3　実際，サンスクリットとヨーロッパ諸語との類似性から【比較言語学という】新たな学問分野を切り開いたのは，フランス人でもなければ，この類似性にいち早く気づいたイギリス人でもなく，デンマーク人とドイツ人であった。彼らにしてみれば，自分達の言語と古代の権威あふれる古典語とを比較することで，自尊心を大いに満足させることができたのである。比較の枠組みの大綱を最初に示したのはデンマーク人の Rask であったが，その後三四半世紀の間，印欧語比較文法を構築して行くことになるのはほぼドイツ人に限られていた。この語族を指すのに，ドイツでは今でもインド・ゲルマンという用語が用いられるのが普通であるが【cf．1.4】，その国威発揚という点において，この新たな学問分野が果たした役割がいかに大きかったかが，この用語一つからも伺い知れよう。この学問が他の国ではまだあまり発達していなかった時期にあって，ドイツのあらゆる名のある大学にサンスクリットの講座が設けられ，サンスクリットとギリシア語，ラテン語は言うに及ばず，「ドイツ語」との比較も盛んに行われた。当時，「ドイツ語」は，ゴート語からアングロ・サクソン語や古代アイスランド語にまでを含む，ゲルマン諸語ほぼ全ての総称として用いられていたのである。

7.4　フランス【語圏】では19世紀後半にアルザスの Bréal と，少し遅れてジュネーヴの Saussure がこの新たな学問をものにした。パリが比較研究の進展に有意義な貢献をなすようになるのは20世紀に入ってからのことだが，それは Meillet の活躍を受けてのことである。

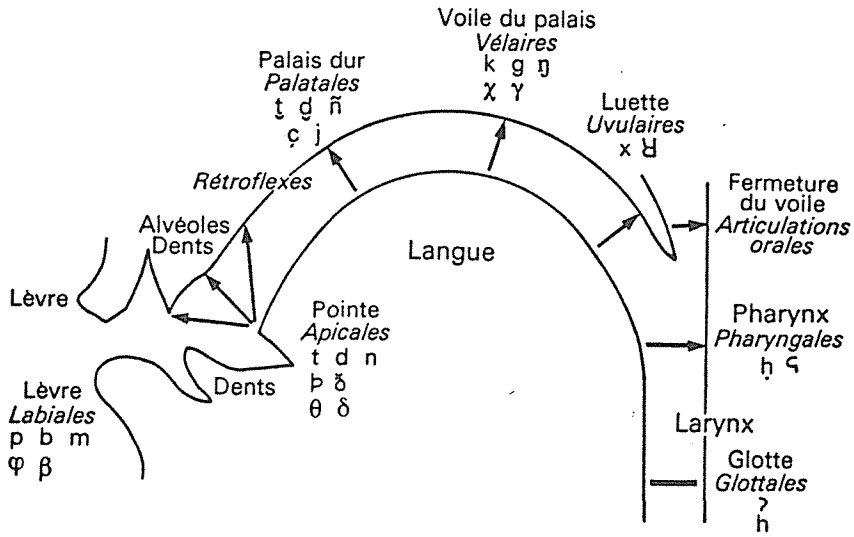
7.5　当然のことながら，印欧諸語を比較する目的は何なのか，という疑問がわくことであろう。これによって先史をさらに遡ろうというのだろうか。一つのモデルを作り上げ，他の語族に応用することによって，人類の言語がかつてどのようであったのかを究明しようというのであろうか。非常に古い言語資料を研究することによって，どんな条件下で，どのように諸言語が発達するのかを見極めようとするのであろうか。程度の差こそあれ，明らかにこれらすべてがその目的である。だが，特にカリキュラムの中で比較言語学は文献学的研究の付け足しであるかのような扱いを受けている。古典文献をよりよく理解するのを助けるのがその目的であるかのようにである。英語ではこの学問が公式に「文献学」(philology)と呼ばれるようになって久しい。フランスでは今でも相変わらず一般にこの学問は，文献学者の長老が番をしている聖なる遺物を納めた箱のように受け取られている(4)。確かにこれは信憑性に乏しい説や愚にもつかないたわごとを排除する一つの方法ではあるが，その成果を世に知らしめることもあまりしていないし，時勢に合っていない教育体制を見直すのにもほとんど役立っていない。

7.6　当然であるが，すべては古い単一の言語から分かれたと考えられる諸言語を比較することから始まる。ロマンス諸語はラテン語を出発点として分岐的発達を遂げた結果生じたのであるから，ロマンス諸語の比較研究から得られるモデルはこの分野で大きな役割を果たすと期待された。だが，この期待は裏切られてしまった。実際，ロマンス諸語相互のきちんとした比較研究が行われるようになったのは，古代の印欧諸語の同種の研究に先立つどころか，その後のことであって，【ロマンス諸語という】直接入手できる言語事実を詳細に調査することによって言語発達につい

ての動的な理解が得られるかとも思われたのに，ロマンス諸語の比較研究はこの点について何の寄与もなさなかったのである。印欧語学者も文献学的研究を行うが，ロマンス語学者は彼らと同様に，あるいは彼ら以上に，相も変わらず純粋に文献学的研究に勤しんできたし，多くの場合に今日でもそのままの研究を続けている。話されていることばは捕まえることができず，伝達すべき経験が種々雑多であるために，必然的に起こるあらゆる改新に常に影響を受けやすいものである。それに対して，書かれたテキストは永遠に変わることがなく，安心感を与える。文献学的研究が行われやすいのはこの点に惹かれてのことである(5)。

7.7　言語の比較は，当然ながら，一点づつ行われる。最初に気付く類似性は語の諸形態の中にある。これは語根，すなわち語の変化しない部分に現れることもあるし，格，数，人称，時制及び法の意味が付与された語尾に見られることもある。初めのうちはあまり拘泥する必要もなく，作業はスムーズに行われる。明白な一致を拾い出し，個々の言語の特徴だとみなした相違のことは考慮しない。でも，すぐにこのような相違がでたらめなわけではないことが，例えばサンスクリットでp-が現れるときには，ゴート語ではf-が現れることがわかってくる。これはpitā(r)(6)～fadarばかりでなく，家畜を表すpaçu【「家畜」】～faihu【「牛」】，pāt～fōtus「足」，pūrnas(7)～fulls「満ちた」などにも，さらには形の点でも意味の点でも似ているその他多くの場合にも現れるのである。このようにして，Skr. p-～Gk. p-～Lat. p-～Sl. p-～Goth. f-～Ir. ゼロというような規則的な対応が得られる。

7.8　次に疑問となるのは，当然だが，どの言語が改新を経て，どの言語が本来の形を保存しているかである。多くの場合に，その答えにはほとんど疑いの余地がない。例えばサンスクリットのp-は絶対的多数の語派に現れる要素であり，他方f-とゼロはそれぞれたった一つの語派，ゲルマン語派とケルト語派にのみ現れる。ここに音声学的な妥当性が加味される。ゼロが[p]に転じることなどまずありえない。[f]が硬化して[p]となるというのもこの場合まず無理であるが，[p]が弱まって[f]になることなら大いにあり得る。その場合に中間的な段階として想定されるのは上下の唇の間を呼気が通過して生じる摩擦音[φ]である。これがはっきりと聞こえて，結果的に，その弁別的機能を保持する必要があるのなら，はるかに聞き取りやすい[f]に転じる必要がある。この変化が起きない場合，両唇摩擦音の代わりに最終的に聞かれるようになるのは，声道のもっとも狭い部分である声門を通過する呼気の音である。音声記号で記せば[φ]が[h]に転じることになる(8)。消失しても混乱が生じないのであれば，この[h]自体も消失してしまう可能性がある(9)。



原図14　子音の調音図[10]

調音のタイプはイタリックで記される。スペースが足りない関係で，図では舌尖音のヴァリアントである「舌尖・歯音」と「舌尖・歯茎音」，並びに「唇歯音」(f v)の記載を省略した。各々のタイプの一行目には閉鎖音が，二行目には持続音が記されている。一行しかない場合，記されているのは持続音である。舌尖音については，硬音の持続音（二行目）と軟音の持続音（三行目）とが区別される。

スー音(s z)とシュー音に(š ž)ついては，呼気は舌の正中部の溝を通過し，摩擦音は前舌部と前部硬口蓋の間で起こる。

研究書においては，反り舌音は下に点を書いて記され，硬口蓋音と硬口蓋化音は同じように次に鋭アクセント記号【(′)】を付加して記される。再建形では硬口蓋音を指す。ロシア語を記す場合には，特定の調音と硬口蓋での調音とが結びついた硬口蓋化音の意味である。

7.9　だが，p が古い形だと想定することにより，単純な対応関係のさらに次のレベルに進むことになる。文証される諸言語の基となり，すでに消滅した言語の音素が再建されるのである。仮想的であることを示すために，*p のようにその前にアステリスクが置かれる。このようにして，所与の語を構成するすべての音素を再建することができる。例えば Skr. paçu，Goth. faihu，Lat. pecu から，【IE】*peku が再建されよう(11)。さて，この作業を繰り返してその言語のすべての語及びすべての文法的形態が再建できると考えれば，その言語自体が再建されたのだと，さらにはその結果，その言語でまとまったテキストを書くことだってできるはずだと考えられることにもなろう。

7.10　これには有名な先例がある。ドイツの比較言語学者 August Schleicher が印欧祖語で寓話を書き下ろし，1868年に Avis akvāsas ka，すなわち「羊と馬たち」という名で発表したのである。その第一行だけを記すと，Avis，jasmin varnā na ā ast，dadarka akvams...「毛のない羊が馬たちを見た云々」(12)となっている。運の悪いことに，その数年後に当時まで用いられていた再建の基本的手法の一部が見直され(13)，そのため羊は avis ではなく*owis と，羊毛は varnā ではなく*wl̥nā と記されるようになった。今日では普通それぞれ*H_3ewis，*wl̥H_2neH_2 と記されるようになっている。Schleicher の試みを追従する者はなく，多くの比較言語学者が対応の枠を越えてリスクを冒すべきではないという見解を表明したのもうなずけよう。例えば Meillet と Ernout による『ラテン語語源辞典』には，アステリスク付きの形はほとんど出てこない。かつてはこのような慎重な態度が取られることが多かったが，その後は，対応を記すもっとも簡単な方法が再建形を用いることであって，この対応を常に念頭に置いておけば過度に慎重な態度を取るまでもないことが了解されている。

7.11　ここで比較文法が再建を行う際に考慮しなければならない，本当の不都合は，印欧語も時の流れに従って発達したことを忘れてしまうことである。再建が試みられるのは，印欧語を話していた民族が分裂しようとしていた，まさにその時点で用いられていた言語である。ここから後に文証される諸言語と同じ数の枝が生じる。もちろん，歴史に足跡を残すことなく消滅してしまった枝もあることだろう。だが，今日，専門家の間ではこれが仮定(vue de l'esprit)であることが充分理解されている。何しろ，たった一回，突然に分裂が生じ，これによってあらゆる印欧諸語が生まれたなどというのは，全く信憑性のない想定だからである。この点でヒッタイト語の解読は決定的であった。ヒッタイト語がギリシア語やサンスクリットと親近関係を持っているのは確実だとしても，例えば男性と女性の区別のような，伝統的に比較言語学の二本の柱であるギリシア語とサンスクリットに共通して見られる諸特徴がヒッタイト語には全く欠けているのである。「現在」の-iと呼ばれる要素(14)のような形もしばしば見いだされるが，その現れる場合には制限があり，条件もかなり異なる。ヒッタイト人は楔形文字で書かれた音節文字を用いていたため，形態が予想に反する形状を取り，これによっても違和感を受けることもある。ヒッタイト語学者にして比較言語学者であった Edgar Sturtevant の反応は，実際，再建がどのように理解されて

いたかという点に関して，非常に示唆に富むものであった。印欧祖語とは，伝統的に近親関係にあると認められた諸言語を比較した結果を，一つのスクリーン上に投影することから得られると考えられていたのである。これらの言語にヒッタイト語を加えると，映像がぼやけてしまうのだから，再建すべきもう一つの言語を映し出す別なスクリーンが考慮されねばならないことになろう。彼はこれをインド・ヒッタイト祖語と呼んだ。

7.12　Sturtevant はこのように再建される印欧祖語の伝統的イメージを擁護しようとした。だが，一部の基本的な作業が見直されようとしている時期にあって，こうすることは賢明だったのだろうか。実際，彼に追従する者はほとんどいなかったし，もうインド・ヒッタイト語が話題にのぼることもない。しかし，Sturtevant の提案が排斥されねばならなかった理由を，もっと声を大にして，もっと明示的にすべきだったのではないだろうか。今や問題は，ある民族が世界中に散らばる直前に用いていたとみなされる【単一の】言語状態を再建することではない，ということを，実際，関係する研究者全員に知らしめる必要があったのではないかと思われるのである。再建すべく努力を傾ける必要があるのは，言語発達の動的な側面であって，それにはでき得る限り過去に遡ることや，相次ぐ言語状態を調査することによって確認される発達過程を敷衍したりすることが行われる。これらの言語状態とは書かれたテキストから得られるものには限らない。比較によって再構成される言語状態も，文証される古風な用法を解釈することによって得られる言語状態も含まれる。５０年来，非常に多種多様な言語構造が記述されてきたが，これによって多くの経験が集積されており，古い用法を解釈する際にはこの経験が活用される。

7.13　以下で課題となるのは，この方向に研究を押し進めることでも，単にこの種の研究の手順を述べることでもない。時には微に入り細に入り，示そうと思うのは，印欧語の構造についての概念が今日までどのように移り変わってきたか，ということである。羊を表す語の再建形が *avis，*owis，*H_3ewis のように移り変わってきたことについては上で少し触れたが，これに類する概念の変遷である。

7.14　言語構造は，そのあらゆる部分が他のすべてを規定する，一つのまとまりであるにせよ，言語の中の様々なレベルを区別しなければその働きは理解し得ない。陳述，すなわち話者が伝えたいと思う，経験がまとまった言語形態に到達するよりも前に，様々な単位を規定せねばならず，これらの単位が登場するレベルをはじめとして，様々なレベルを次々に調査する必要がある。したがって，最初にしなければならないのは音韻論であって，音素と，より広く言えば意味を表す諸要素の形を規定するのに役立つ諸特徴が検討される。その後には文法的形態の検討，陳述の機能的構造に関する議論，そして最後に語彙についての概説が続くことになる。

訳註

（1）1786年2月2日に行われた William Jones の有名な講演を指していると思われる。言わずもがなであるが，その問題の箇所の主旨は，サンスクリットとギリシア，ラテン，及びその他のヨーロッパの言語との類似は非常に顕著で，これらが共通の祖語に起因するとしか思えないということである。

（2）Ferdinand de Saussure の用語で言えばシニフィアンとシニフィエの関係が恣意的であるということを指すのであろう。

（3）変形生成文法を指すと思われる。

（4）原著に記された chasse は châsse の誤植であろう。

（5）この指摘には襟を正す必要があろう。「ロマンス比較言語学」なるものを専攻される某氏は本学学術研究双書(1994)において，印欧語比較言語学を「知的遊戯に過ぎない」(p.18)と，他方ロマンス諸語の比較言語学は文字に書かれたデータを有するから「科学的」(p.18，19)と断言し，さらには同書を「比較言語学の模範」(p.207)とまで自負なさっている。確かにそこには現代ロマンス諸語の諸データが並べられているものの，通時言語学的な検討があまりにも不十分で，この本で行われていることを「比較言語学」と呼ぶことは不適当と言わざるを得ない。同書が「比較言語学の模範」であるとする誤った認識が後進に受け継がれることがないよう祈りたい。

（6）原著では pitār と書かれているが他所に統一した。当然だが、単数主格は pitā，語幹(guṇa)は pitar-であり、両者を併せて表記している。

（7）サンスクリットでは r/l の区別が実に曖昧で，普通には r が現れる。

（8）この段階はアルメニア語に見られる。日本語のハ行子音の変遷を参照。

（9）本書でも何度か言及されているように，ケルト語はIE *p を[h]の段階を経て完全に無音化した。ラテン語からロマンス語への発達においても h の無音化の現象が生じている。

(10) 第2版で若干の訂正が加えられている。原著者の音声学に関する用語・記号は国際音声学会のものと幾分か異なる。Cf. Martinet(1972: 55ff.).

(11) 語頭音以外について簡単に解説しておく。サンスクリットは祖語の*e *a *o すべてを a とする。ç は5.5に記されるサタム化による。Goth. ai は[ɛ]を表す。Gmc. h<*[χ]<*k は語頭の f と同じく閉鎖音の摩擦音化（グリムの法則）による(Cf. 5.61)。

(12) 風間(1978: 151f.)にその全文とサンスクリット訳，Hirt による改訂版，日本語訳が併記され，解説が施されている。参照されたい。

(13) 大ざっぱに言えば青年文法学派まではサンスクリット中心主義であって，母音には a ばかりが，他語派で l が見られてもサンスクリットで r が生じていれば r がそれぞれ採用されていた。

(14) 動詞の人称語尾には単数1,2,3人称，複数3人称の順に-mi，-si，-ti，-nti と -m，-s，-t，-nt の二種が再建され，前者は第一次語尾，後者は第二次語尾と呼ばれることが多いが，前者は後者に-i が付加されたものと明らかに分析できる。この要素はしばしば hic et nunc の-i と称される。

第Ⅷ章
音変化と類推

音変化の規則性

8.1　印欧諸語の比較と祖語を再建する試みとが真の意味で科学的性質を獲得したのは，音変化が規則的に行われるという確信が得られてからのことであった。つまり，ある特定の言語で，ある特定の時点で，所与の語の内部でａがｅに変化したなら，他のあらゆる語においても同じ変化が生じると期待されるのである。唯一例外が認められるのは(音声)環境が異なる場合である。例えばラテン語からフランス語への推移においてａはｅに変化したが，それは開音節と呼ばれる音節，すなわち母音の後に何の子音も続かない音節においてのみであって，それ以外の場合にはaが保存された。mare(ma-re)はフランス語でmerとなったが，parte(m)はpar-te(m)と発音されており，フランス語ではpartとなった。ただし，同じ開音節であっても，次の音節がｎあるいはｍで始まる場合にはａは-ai-となった。例えばpane(m)はpainに，fame(m)はfaimになっている[1]。これらすべての場合は規則的な変化なのである。

8.2　その例外が見られるのは，例えば，聖職者がラテン語のclārusという形態に惑わされて，本来clerでいいところをclairと綴ってしまったような場合のみである。だが，このような例外も様々な影響から生じたのかもしれない。例えばfiancée「婚約者の女性」のfian-という部分はパリでは普通confiance「信頼」の場合と全く同じく一音節で発音される。両者とも同じ語根[2]を含んでおり，これはfier「誇り高い」やconfier「託す」の語根とも同じである。ところが，このfiancéeをあたかもfillancéeとでも綴られているかのように発音する，正則的でない発音もまた聞かれることがあり，ここではfille「娘」との連想が働いているのである。このような場合，fiancéeとfilleの連想によって，[i]＋母音が[j]＋母音になるという正則的な発達が阻まれたのだと言われる。このような連想を想定することは仮定に過ぎず，このプロセス自体も観察されないという点は，よく認識しなければならない。-ai-を用いてclairと書くことに決めた人についての確たる証拠でもあるならば無論話は別だが，clerがclairに置き換えられたことのような場合についても恐らく同様のことが言い得る。一連の研究者が不承不承ながらもこの種の仮定に頼らざるを得ないのはこのようなわけなのである。

強調による例外

8.3　原則として，ある音を含む語の意味が変化しても，その音の発達に影響が及ぶことはない。とはいえ，話者は自分の発する語の意味に影響を受けるから，特別な力を込めて語を発するような場合もある。affolant「衝撃的な」の[f]をとても長く発音するのがしばしば聞かれるのはこのためである[3]。このように発音されるのは，綴の上でｆが重ねて書かれているためではない。何しろ，affaire「事件」やaffranchir「解放する」ではこのような【[f]を長く発音する】こと

は行われないのである。このような長い発音が，そのようにする必要性もない場合にも，すなわち話者が特に「衝撃を受けている」(affolé)わけでもない場合にも，模倣され，広がって行くのだろう。このようなことから語の発音が恒常的な影響を受けるようになる場合もあり得る。例えば英語の knock「たたく」という語を例に取ってみよう。古英語ではこの語は cnocian と綴られ，母音間の-c-は重ね書きされずに[k]と発音されていた。このままの形でその後発達したとしたら，この語は oak，soak，coke 等と脚韻を踏んでいたことであろう。ところが，この語は最も古い時代から長い，すなわち重音化した[k]を伴って発音されていたと思われ，実際，それから数世紀を経た中英語において重ねて書かれた-kk-を含む形，つまり knokke が文証される。これによって現代英語の短母音を持つ発音に説明が与えられるのである。

8.4　19世紀終わり及び20世紀初頭の言語学者諸氏は，言語の音の変化はその音の現れる語の意味には影響を受けないという原則を主張し，先達を論破する必要があったため，強調によって音が延長される可能性をもしばしば否定した。

8.5　knock のような場合を説明するために，彼らは-n を有する接尾辞を想定し，文証される以前の時代にこの接尾辞が knok-をはじめとする一連の語の語根に付加されていたと考え，これによって生じる-kn-という連続が後に-kk-に縮減したとみなした。しかし，-kn-は実際に現れており，特にこの語の語頭にも生じているため，特別な条件を想定する必要があった。つまり，-kn-が-kk-に転じたのは，母音に挟まれたときで，かつアクセントがこれに続く母音にあるときだけであるとしたのである。しかし，ゲルマン語では古い可動アクセントが先史時代に語の第一音節に固定した新たなアクセントによって取って代わられたのであるから，このような「音法則」の有効性を証明することは全く不可能なのである。

8.6　実際，語の意味がその語を構成する音に影響を与える場合があるということを否定することはできない。ただし，ここから言えることは，意味が関与することがあるのは変化のきっかけであるという点のみである。したがって，強調による延長が定着し得るのはあらゆる場合というわけではなく，該当の語が使用される条件がそうされるのにふさわしい場合に限られる。

なぜ「音法則」なのか？

8.7　上にご登場願った「例外のない音法則」の熱烈なる信奉者諸氏は，長い間それらの存在の説明を模索していた。今世紀の30年代に至って，ようやくこの問に対する答を見出した。それは，すべての言語には限られた数の音素と呼ばれる音単位しかないとするものであった。各々の音素には特定の調音習慣が対応している。新たな言語を学ぶ際にその【＝調音習慣の】点で幾多の困難が生じるのはこのためである。例えば英語を例に取ると，thin の最初の音素は/þ/と記され，これは口腔から出る呼気が舌先と上の前歯との間で作られる狭めを通過することによって発される。フランス人はこのような調音を全く知らない。関係する諸器官を上で述べたような位置に置こうとしても，フランス人はこれらの器官を接触させることしかできず，そのため呼気の通路を

塞いでしまい，結果的に緩んだ発音をしたときのフランス語の/t/を発してしまうのである。[þ]を耳にしたときに感じる摩擦を出そうとすれば，舌の筋肉が緊張して舌が前に行き過ぎ，呼気は舌の正中部にできるくぼみを通ることになってしまう。これはフランス語の/s/を発するときに行われることである。このため、英語を学ぶ子供達は/þ/を発する習慣を習得しなければならないことになる。無論，このような【調音】習慣は世代を下るに従って少しづつ変わって行くかもしれないが，この習慣に従って発音される語の意味とこの習慣とは無関係であるから，例え文脈上意図される意味がいかなるものであっても，あらゆる【調音習慣上の】変化は同一の方向に向かうのが常なのである。逸脱が生じ得るのは，ある調音習慣が，発話の中で先行する習慣あるいは後続する習慣と折り合いが悪い場合である。

隣接音の影響

8.8　例えばフランス語の音素/a/を例に取ってみよう。これは声帯を振動させ，口腔の大きさを最大にすべく口を大きく開き，これに口蓋帆の上げを組み合わせた調音習慣である。例えばadieuのようにこれに/d/が続く場合を考えてみよう。/d/は声帯を振動させ，口蓋帆を上げて作られる音であり，ここまでは/a/と何等折り合いの悪い点はない。両者の相違は，/a/で口が大きく開かれた後に，舌と歯とで口腔内に閉鎖が作られるという点である。このように続けざまに声道を広げたり閉じたりを急激に行うことは，ことばがよく通じるためにまさに必要な条件である。/a/の開口性が/d/の閉口性に影響を及ぼすのは，非常に特殊な場合であり，フランス語ではこのようなことは生じない。/a/に続く子音が/n/の場合には，そこで用いられる調音習慣は/d/の場合とほぼ同じであるが，唯一異なる点は口蓋帆が下がって，呼気が鼻腔を通過し，音が鼻音的な響きを持つことである。この口蓋帆の下げは口腔内の閉鎖と同時に起こるのが普通ではあるが，若干早めに行われることもある。この現象は多くの言語に見られ，英語において特に顕著であって，/n/あるいは/m/の前にある母音が部分的に，さらには完全に鼻音化してしまう。アメリカのCongressは国会のことであるが，[ˈkãŋgres]あるいはさらに[ˈkãgres]のようにさえ聞こえる(4)。このような現象はフランス語では起こらない。フランス人はla nuit /lanɥi/【夜】の/an/という音連続を発音する際，l'ennui/lãnɥi/【心配】と混同を避けるため/a/を鼻音化しないように無意識のうちに細心の注意を払っているのである。

8.9　ことばの連鎖においてこのようにある音素が他の音素に影響を及ぼすことは古くから取り上げられてきた。比較言語学でもこれがよく認識され，現代の言語学では変異の原因の一つに数えられている。ケルト語で*pが脱落する点については上でも幾度となく言及し，かつこれを【説明に】用いてきた。実際この現象は母音間(uper＞uer＞wer)や語頭など，ほとんどの位置において検証される。ただし，-pn-という結合では-p-は確かに弱まるのだが，有声化してさらに音節を成さない[u̯]となり，先行母音と二重母音を構成するようになると考えられる。このようにして，Ir. cúan「港」は[ko:n]＜[koun]＜[koβno]を介して，古い*kopnoに遡るとみなさ

れ得る(5)。この*kopno から Dan. havn, E haven, G Hafen が規則的に導かれる。この*kopno-という再建形は，言語間の対応の詳細を明らかにすべく比較言語学がどのような方法を用いたのかを例示する好例である。Ir. cúan と G Hafen を比べてみれば，共通なのは末尾の-n だけのように見えるが，両者とも規則的な，すなわち原則として例外のない発達によって*kopno-から導かれる。すなわち，あらゆる k-はゲルマン語において h-となり，o は a となるが語末では脱落する。この言語では p はアクセント的に一定の条件のもとで-f-に転じた【Cf. 5.61ff.】。末尾の-fn は西ゲルマン語で支え母音を発達させ，-fen となった。英語ではその-f-が母音間で有声化し-v-に転じる。デンマーク語では子音の前の-f-が同様に-v-となり，最終的に音節を成さない[u̯]に転じたのである。

同一語の異形態

8.10　上で述べたように，音素が生じる環境によって異なる発達を遂げるとすると，同一の有意味単位がある環境ではある形態で現れ，別な環境では別な形態となるということもありうると考えられよう。ラテン語の amīcus「友」という形態を例に取ってみよう。その複数形は amīcī であり，c は単数形の場合と同様に[k]と発音された。ラテン語からイタリア語への発達の過程において，[k]は i と e の前で硬口蓋化され，その結果，amīcī は[aˈmi:ki:]から[aˈmitši]へと変化した。この複数形は使用頻度が高かったため，このままの形で今日まで保存された。tronco「幹」の複数形も，同じく[tši]を持つ*tronci となることが期待される。ところが，-o に終わる名詞や形容詞の複数形は単に-o を-i に換えて作られるのが普通であるため，語根の形を変えない多くの複数形の類推で，問題の複数形は作り直されて，tronco の場合と同じく[k]を持つ tronchi となってしまった。綴りは【c から ch に】変わっているが，規則的な複数形は tronchi である(6)。

8.11　ある音節に強さアクセントがあるか否かが音声環境の違いとなることもしばしばある。フランス語では，ラテン語の短い o がアクセント音節においては eu となり，無アクセント音節においては ou となるのが正則である(7)。il meurt「彼は死ぬ」なのに nous mourons「我々は死ぬ」や mourir「死ぬ」(不定形)となっているのはこのためである。後者二形態においてはアクセントが語根ではなく-ons あるいは-ir の部分にあったのである。【この語の諸形態のうち】meurt と mourir の使用頻度が最も高いため，フランス語を聞き覚える過程にある子供はこの両者を耳にしながら，だんだんに-eu-の形態と-ou-の形態との区別がきちんとできるようになる。しかし，これには長い時間を要する。何しろ，子供は，meur-とmour-とが同一の現実を表していることを理解した瞬間から，両者の混同を始めるからである。L'oiseau va m*ou*rir「鳥さんが死んじゃう」【イタリックは訳者，以下同】と聞けば，子供は s'il m*ou*rt【m*eu*rtの誤】「鳥さんが死んじゃったら」と言うであろうし，tu m*eu*rs「君は死ぬ」と言われれば，vous m*eu*rez【m*ou*rez の誤】「あなたが死ぬんだ」と反論するかもしれない。これらのケースにおいて子供は類推を働

かしているのである。このような類推の働きは子供がまだかなり幼い頃から見られる。知恵が付いてきたしるしである。これから言えることは次のことである。すなわち，子供は耳にするあらゆる言い回しを，時には間違えながら，反復して習得するわけではなく，例えその形態が前後の環境によって変化する場合であっても，子供は有意味単位をきちんと認識するすべを心得ているのである。

類推

8.12　類推は言語発達において大きな役割を果たす。なぜなら，音論的には規則的に予想されるものの言語の機能をいたずらにややこしくするような形態もあるものであって，あらゆる新たな世代は子供の頃からそのような形態を排除する傾向を持つものだからである。今日のフランス語では...il prouve「彼は証明する」，nous prouvons「我々は証明する」...のように活用が行われるが，古仏語ではこれと異なり，il meurt，nous mourons と同じように il preuve (prueve と綴られる)，nous prouvons と活用していた。prouver は mourir ほど使用頻度が高くなかったため，類推が働いて音論的に規則的な形態が失われてしまったのである。正統的な形態は名詞のpreuve「証拠」のみに保たれている。

8.13　ある状況においては類推作用が促進されることもある。古仏語においては laver「洗う」にも母音交替が行われていた。つまり，【今日のような】il se lave，nous nous lavons ではなく，il se lève，nous nous lavons のような活用が行われていたのである(8)。だが，lever「持ち上げる」の（類推による）形態である il lève(9)との衝突が早期の段階で起こり，これによって laver のすべての形態に-a-を拡大することが促進されたのであった。

8.14　フランス語の動詞 rêver「夢見る」は結局のところ E rave「戯言を言う」と同じ単語だと言えるが，両言語において類推が異なる方向に働いている(10)。

8.15　類推が行われることによって比較言語学者の仕事は大変複雑になる。何しろ，「音法則」のおかげである形態の発達が予測できるのは確かだが，類推の働きのかなりの部分は予測できないのである。例えば使用頻度が考慮に加えられることがあるが，直接観察できる現代語についてはその算定を細かく行うことができても，仮想される言語状態についてその頻度を決定することは諦めざるを得ない。形式的な厳格さを求める方々が自身の論理に類推を加えるのを嫌うことがあるのはこのためである。彼らの気が進まないのは理解できるが，【言語】進化のプロセスにおけるそ【＝類推】の重要性は否定しようもなく，我々の先達が再建作業の中で類推に与えた位置を【今日でも】類推に与えることが必要である。

langue の例

8.16　各種の類推が果たす大きな役割を例示するために，langue という語のケースを取り上げてみよう。この語は，伝達のための器官【＝舌】，及びより多くの場合にそのための道具【＝

言語】の呼び名として，【印欧語の】ほとんどすべての語派に現れる。再建される原型は*dn̥g^{h}weH$_2$という形であり，そこにはもともと子音に挟まれて複数の母音があったと考えられるが，ここに残った母音は末尾のもののみであり，以下で見るようにこの母音もその後消え去ってしまうことがある(11)。この語は本来的に複合語であった可能性が高い。実際，単一の記号素(monème)で五つの子音を伴うものは知られていないのである。この原型から規則的な発達によってLat. dinguaが得られるが，この形が現れるのはまれで，通常用いられる形はlinguaである。ラテン語にはこれ以外にもdとlとのゆれが見られる場合がある。一例をあげると，odor「臭い」にはolēre「臭う」が対応しており，例外的な形olorもある。だが，langueのケースでは，lingō(12)「なめる」からの類推によってlが生じたことに疑問の余地はない。このようなタイプの類推は「類音牽引」(attraction paronymique)と呼ばれている。かつて短剣を意味した【F】braquetが，火を起こす道具【briquet】に引かれてbriquetに転じたことにも見られるように，このような牽引は意味的な類似性がなくとも行われることがある。上記のケースのように意味的な類推と形式的な類推とが明白な場合にはなおのことである。ラテン語の語末の-aは，-eH$_2$から規則的に生じた古い-āが語末において通常の弱化を受けた結果である。以下【9.30ff.】で見るように，H$_2$はG achやSp. jota(j)のように発音されたと思われる。この音が口腔後部で調音される音であったために，これにつられて【先行する】母音は[a]となり，H$_2$が脱落したときに代償延長を受けたのである。

8.17　Goth. tuggō(発音は[tuŋgo:])からE tongue，G Zungeに至るまで，ゲルマン語の諸形態は完璧に正則的である。

8.18　Lith. liežùvis(13)の語頭にも l-が現れているが，これはラテン語の場合と同様に「なめる」という意味の動詞liežìù【現在一人称単数】からの類推によっている。第一音節の-ie-という母音は上記の動詞と共通している。g^{h}がžに転じるのはサタム語たるリトアニア語では規則的なことである。また，末尾の-uvisは同じ意味のOPr. insuwis，すなわち[inzuvis]の該当の部分と同一である。後者の形態では語頭のd-が消失している(14)が，これは古代教会スラブ語【jezykъ】の場合と同様であり，【現代スラブ諸語で】そのまま今日まで受け継がれている(15)。ここでも類推が行われているのかもしれないが，それがどのようなものなのかは不明である。これらのバルト語とスラブ語の形は上記の-w-と-H$_2$の間に想定される母音が脱落した形を支持する(16)。このような脱落が生じたのは，アクセントが曲用語尾にあった場合のみである。つまり，主格は*-g^{h}weH$_2$-sであったのに対し，属格は*-g^{h}uH$_2$-ésであった。類推によって後者の形が一般化されたのである。この場合，子音間の-w-は-u-となり，そのため問題の後要素は*-g^{h}uH$_2$となった。対格は子音の後では-m̥と記される音節を成すmによって形成され，これがスラブ語とバルト語では-imに至る。この形態からの類推によって，問題の語根が-iに終わると解釈され，そうしてliežùvisやinsuwisのごとき-isに終わる主格が形成されたのである。-g^{h}uH$_2$i-において母音間のH$_2$は規則的に脱落するが，-u-と-i-の間で連結の[w]が生じ，これがその後-v-へと

転じた。

8.19　スラブ語の場合，類推の基礎となったのは【バルト語の場合のように】対格の形態ではなく，主格のそれであった。当然ながら，これは例えば属格*-g^huH_2-és のごとき語尾にアクセントを受ける諸形態からの類推で生じた新たな主格である。したがって主格は*-g^huH_2+s となることであろう。この音声環境において，G sechs［zeks］「6」における ch のように，H_2 は k に硬化して(17)，上記の形態は*-g^huks となった。対格において，その指標-m はこの場合非成節的な扱いを受けた。これは次の語が母音で始まるケースの類推的援用である。つまり，バルト語では*-g^huH_2m̥ だが，これは次の語が子音で，例えば t で始まる場合に期待される形態であり，その際には-H_2mt-という連続は発音が困難である。スラブ語から想定されるのは【母音，例えばo-で始まる語の前の】*g^huH_2m o-であり，その際の母音に挟まれた-H_2m-ならば発音が容易なのである。-uH_2m-という連続は規則的に-ūm となり，そこでは-m が対格の語尾で，-ū-が語根の末尾である。そうなると問題の形態は主格が-uk-s，対格が-ū-m ということになる。ここで均一化(unification)が行われ，-k-が対格に，-ū-が主格にも用いられたとすると，それぞれ-ūk-s，-ūk-m̥ が得られる。類推によってこの-ūk-が他の格にも広がったと考えられよう。しかし，以下に述べるような様々な処理を受けにくいため，子音に終わる語幹よりも母音に終わるもののほうが安定がよく，また好まれており，前者が後者に取って代わられる傾向によって，今問題にしている-ūk-が-ūko-に取って代わられたと考えられる。そうすると主格は-ūko-s に，対格は-ūko-m に，【奪格起源の】属格は-ūko-ot＞-ūkōt に等々となる。このようにして最終的に*n̥g^hūko-が得られる。だが，この時代の直後に g^h は z に（サタムの処理），n̥-は in-へと転じた。この*inzūko-を出発点としてその後規則的な発達が行われる。in-は ĩ-を経て，その後文証される ẽ-に至り，さらにロシア語では ja となっている(18)。上記の語形中の-ū-はこの言語のすべての ū と同じく円唇性を失い，末尾の母音は脱落する。こうして現代ロシア語の形態 jazyk が得られる。

8.20　ここで分析の対象をイラン語とインド語，及びケルト語の形態にまで広げるのは控えておく。これらの形態には完全に規則的な特徴が見られるものの，これまでに問題にしてきたのと同じタイプの逸脱が生じているのである(19)。

8.21　興味深いことに，この語根の最後にある二つの子音の間で母音を保持した言語においては，langue に当たる語は女性名詞である。すなわち，この性に特有の-eH_2 という連続，あるいはそこから出た-ā が残ったのである。この場合の主格は-s を加えられなかった。逆に，その母音が脱落した場合には，語幹はバルト語では-i，スラブ語では-k，イラン語の一部の形態では-hu に終わることとなり，その場合に落ちついたのは無標の性たる男性である。言語それ自体が女性と考えられるなどというのは愚にもつかない戯言である。女性と男性の対立はここでは単なる形態上のことがらなのである。

8.22　トカラ語にはメタテーゼを受けた，つまり子音の位置を逆にした形態がある。*dn̥g^hweH_2

からは tänkwa が期待されるところなのだが，そのB方言では käntwa となっているのである。Arm. lezu の語頭の l-は【上記のラテン語(8.16)とリトアニア語(8.18)の場合と】同様に lizanem「私はなめる」に起因している。

8.23 *dn̥gʰweH₂ の末裔が現れない唯一の印欧語の語派はギリシア語であり，そこでは全く関係のない語 glōtta，glōssa が用いられている。

類推による様々な結果

8.24 類推の様々な働きと，当然だが，規則的でありながらも言語ごとに異なる音発達のために，F langue と R jazyk 程も異なる結果が生じ得る。上に記した langue に当たる語はこのことを例示する好例であった。この語についてのすべてのケースで類推が果たしていたのは簡略化の役割である。何れの言語においても，結果として生じた形態の語幹は全く変化しない。例えば，F langue は常にこの形のままであって，複数ではこれに他の名詞の場合でも用いられる指標-s を表記の上だけで加えている。Lat. lingua は-a に終わる名詞一般の変化をする。また，R jazyk は変化しない基底部であって，必要とあればこれに男性に特徴的な格語尾が加えられる。

8.25 しかし，非常に使用頻度の高い語については，同一言語の中で類推が異なる方向に働き，そのため語尾を付加すると語幹まで交替してしまうような場合もある。例えばフランス語の近接未来 je vais aller【“I am going to go”】で助動詞として用いられている動詞 aller【“go”】の使用頻度は，他の助動詞である être【“be”】や avoir【“have”】とほとんど変わらない。【aller の変化形である】va，allons，ira，aille といった様々な形態を学ぶ過程にある子供達は，これらが同じ動詞の変化形であることをまだよくわかっていない。on allera【iraの誤】や il faut qu'il alle【aille の誤】といった類の類推に基づく形がそのまま保持されることはまずない。nous allons と聞いて on allera と言ってしまう子供も，on ira という言い方は知っていて，他の場合には自然とそのような言い方をするものである。

8.26 pont「橋」に当たる語のケースと，この語がサンスクリットで取る諸形態は，上記のような可能性を例示する好例である。pont についてはすでに【4.1】触れる機会があり，この語は最初は道の意味に過ぎなかったが，ある状況の下で川や沼等の水の上を渡るための建造物の意味にまで達したことを記した。サンスクリットでこの語が持っているのはまさにその本来の【「道」の】意味である。この語の曲用には 4 つもの異なる語根が生じる。すなわち，①単数主格 panthā-s 等に生じる panthā-，②複数主格 panthān-as 等に生じる panthān-，③単数属格 path-as 等に生じる path-，④複数与格 pathi-bhyas 等に生じる pathi-である。基底の要素は①と③に現れている。属格の pathas からは *pn̥tH-という語根が再建され得る。属格語尾の -e/os にアクセントが置かれたため語根部の母音は縮減している。この曲用全体に見られる th はこの形に端を発している。主格には*pn̥teH-という祖形を想定でき，これに母音を介さずに語尾-s が付加されるとすると，*patā-s のような形が期待されることになってしまう。だが，初頭

【音節】にアクセントを持つ*péntH-sのような形態が並存していたと想定することも必要であって，これはまさにラテン語の主格pōns(＜*ponts)の基礎となった形態であり，またこれによってサンスクリットのpan-に説明が与えられることにもなる。実際に文証される【単数主格の】形態はpanthāsであるが、ここには，アクセントが語尾にあった属格に期待されるth-も，初源的に-t-と-H-の間の母音にアクセントが落ちたときに期待される-ā-も，初頭【音節】にアクセントがあった場合のpan-もが，【同時に】生じていることになる。②は上の語根の後に接尾辞の-n-が加わっているのだが，これはrājā「王」の複数rājānasからの類推によるものである。-i-の要素が現れている④の語根は，OPr. pintis(＜*pn̥tHi-)やスラブ語に現れているのと同様のものである。ただし，後者ではp-と-n-の間に母音を伴って【OCS】põtĭ(＜*pontHi-)となっている。ギリシア語は，【R】jazykの場合にスラブ語が行ったのと同様に【Cf. 8.19】，母音-e/o-を加えることによって形態を安定させた。*pn̥tHo-からはpátosが，*pentHo-からはpóntosがそれぞれ得られ，後者はギリシアの諸都市を結ぶ直接の経路，すなわち「海」を意味する。黒海の名称たるPont-Euxin[20]が知られているが，これは文字通りには「もてなしの海」ということであり，ギリシア人がこの海の沿岸に居住する未開諸部族を恐れていたことを考慮すると，これは明らかに意味が逆の言い回しになっている[21]。

8.27　ここまでやむなく圧縮した形で説明してきたため，【読者諸兄は】次のような印象を持たれるのではなかろうか。小さな子供であれ大人であれ，話者は言語を使っていくうちに何らかの変異形を好むようになるものだが，言語学者というのはそれがどのようになされるのかについてはあまり考慮せずに，紙に記された形態を操っているだけなのではないか，という印象である。実際，文証のない言語や，テキストのみが知られている言語を扱う場合には，働いた可能性のあるすべての類推作用を見いだしたり，想定したりすることは無理である。langueの語頭のl-を説明する場合のように，d-がl-に変化した言語すべてにおいて，l-ではじまる「なめる」という意味の語が存在しているというような，非常に恵まれた場合もあるかたわら，再建する過程で不一致に出会うことも非常にしばしばある。これらの不一致から何らかの牽引作用が行われたのだろうと考えることはできても，問題のことばについて我々の持ち合わせている知識が非常に欠陥の多いものであるため，信憑性に乏しい仮説の域を出られないというような場合も多いのである。

8.28　そもそも研究というものにおける他のすべての場合と同様に、この場合においても，何か新しい情報を含むことがらが現れたら，即座に仮説を再検討する用意を常に整えておかねばならない。だからと言って，多種多様な言語事実を調査することによって，日々得られる知識から導かれ得る仮説のすべてを考慮しないことにするのは，無益な自己批判となることであろう。これまで50年以上にわたって主として記述言語学ばかりが行われてきたわけだが，そろそろ再建に立ち帰ってもよかろう。これによって，我々に先立つ数千年間に生じたことがらを，今まで以上によく理解することができるかもしれない。

訳註

（1）Lat. partem, panem, fanem は何れも単数対格。ロマンス語は一般にラテン語の対格の形を一般格として継承するとされる。

（2）Lat. fīd-(fīdō "I trust et al.")<IE *bheidh- "to persuade et al."(Watkins 6).

（3）類似の現象は大なり小なり多くの言語に見られる。「すごい」に対する「すっごい」，「にこり」に対する「にっこり」のごとき日本語での類例を参照されたい。「びくり」に対する「びっくり」のように語義が幾分異なってしまった場合や，「すんごい」のように撥音が生じる場合もある。

（4）概略的な発音表記であるが詳細は周知のことであろうからそのままとした。

（5）現在では cuan と書かれ，その標準的発音は/kuən/である。Rialtas na hÉreann(1986). この場合その他におけるケルト語のIE *p の痕跡については Lewis-Pedersen(1937: 26f.)等を，u に終わる二重母音が ō を経て Ir. ua に至る点については同書p.89を参照。

（6）イタリア語では前舌母音 i，e の前の c は[tʃ]を表し，この位置で[k]を表記するには chi，che と綴る。

（7）長短 5 母音体系を持つラテン語から音長の対立が失われ，俗ラテン語では 7 母音が区別されたが，Lat. i，u に起因する VL i，u 以外の 5 母音はフランス語においてアクセントを持つとき様々に二重母音化する。その前段階では長音化が行われたと考えられる。問題の Lat. o>VL *[ɔ]はアクセント位置において二次的に *[ɔɔ]に長音化し，次いで長母音を二重母音に変えるという英語の大母音推移にも似た変化を経験して OF uo[wɔ]となった。この音連続は10世紀終わり頃に ue[wɛ]に転じるが，これは後舌母音の連続を排除するため後要素を前舌に異化したためと考えられる。この音連続は12世紀頃に両要素を融合させてさらに[œ]に転じ，eu と綴られることになった。[ɛ]の調音に[w]の円唇性が加わったのである。他方，非アクセント音節では VL *[ɔ]が保持されたが，特にアクセント直前音節では ou[u]に転じる傾向があった。こうして「アクセント音節 eu／アクセント直前音節 ou」の対立が生じたのである。Cf. e.g. Allières(1992: 32ff.), Rickard(1995: 28, 79f., 94).

（8）<Lat. lav(ō). Lat. a>VL a はフランス語において無アクセント音節では保存されたが，アクセント下では恐らく長音化及び *[aɛ]のごとき二重母音を経て、早期のうちに[ɛ]に転じた。強勢音節の[ɛ]と非強勢音節の[a]との交替は，今日でも例えば cl*a*ir: cl*a*rité, je s*ai*s: nous s*a*vons, m*e*r: m*a*rin 等に保たれている。

（9）<Lat. lev(ō). Lat. e>VL *[ɛ]はアクセント音節では長音化と二重母音化を経て OF ie[iɛ]となる。古仏語には正則的な lieve が文証される。Cf. e.g. Bourciez(1937: 65f.). 類推によって動詞の人称形態で末尾の閉音節に è を用いることが義務化してしまった。

(10) Lat. rabi(ō)「乱心する」に由来するため，註8の場合と同じくアクセント音節[ɛ]／無アクセント音節[a]の交替が期待される。F rêver では[ɛ]が，ONF raver では[a]がそれぞれ一般化され，後者より E rave が借用された。

(11) したがって，通例再建される祖形は両音節ともゼロ階梯の *dn̥ghū<*dn̥g^{h}uH$_2$ である。Cf. Pokorny, Watkins.

(12) 原著では誤植により linguo となっている。

(13) 今では「言語」の意味で通常 kalbà が用いられる。

(14) 予想される連続 dn における d が鼻腔開放で実現されるとすると、この脱落は有り得ることである。神山(1995:172)参照。ただしこの過程は成節の n の前に anaptyxis の i が生じる以前でなければならない。

(15) e.g. R язык, Cz. jazyk, Pol. język, SCr. jèzik, etc.

(16) *(d)n̥ghū-＋-i-によってバルト語の形が得られる。以下参照。他方，スラブ語は接辞-k-o-を加えたと考えるのが一般的であるが，原著者がここで紹介する説はこれと全く異なる。cf. 9. 67ff.

(17) 摩擦音の連続は一連の言語において嫌われることがあり，先行する摩擦音が閉鎖音に転じる現象は特にドイツ語に有名である。神山(1995: 187f.)参照。この現象は異化の一種と考えられるが，原著者はこれを「硬化」(durcir)と呼んでいる。

(18) 原著ではフランス人読者の便のために 1.34 に記された方針に従い ia が記されているが，ここでは ja とした。チルダを乗せたのは鼻母音を表す。先史時代のスラブ語が音長の対立を失ったとき，長母音と同様に二モーラであった広義の二重母音も短縮化された。問題の母音＋鼻音の場合には両要素が融合した鼻母音が生じた。鼻母音の数は当初短母音の数だけあったと思われるが，後に前舌と後舌にそれぞれ一つづつ，ẽ と õ となった。これらは e，o と転写されるのが慣例となっている。ポーランド語等を除いて現在のスラブ諸語はすべて鼻母音を失っている。6.22も参照されたい。

(19) Skr. jihvā-においては初頭の j とそれに続く i が期待に反する。Pokorny(1959:223)に従えば，j<*g は第二音節初頭の *gʰ(>h)から離隔同化によって，i は lih-「なめる」からの連想によって説明される。彼はまたを同様の *ghighvā から出発して *zizvā，次いで第一音節と第二音節に z が連続するため前者が無声に異化したと考えて *sizvā より Av. hizvā-，hizū-を導いている。Pedersen(1909: 88)及び Lewis-Pedersen(1937: 25)はアヴェスタの形と Ir. teanga /tʲáŋgə/ の語頭に s-mobile を仮定している。何れの説も充分な説得力を持つとは言えそうにない。

(20) <Lat. Pontus Euxīnus<Gk. póntos eúxeinos「もてなしの海」。ラテン名は Pontus，Mare Ponticum とも。次の註も参照のこと。R Чёрное море，Rom. Marea Naegră，Turk. Karadeniz，E Black Sea，G. Schwarzes Meer，F Mer Noire のように現在では「黒海」という名称が各国語に用いられるが，その由来については確言することが難しい。一説には OP Axšaena「黒い(海)」(Cf. Av. axšaēna-)から翻訳借用によって他言語に広まったとされる(牧1989)が，Britannica にはトルコ人の命名とする説が載せられている。小アジアに侵攻してきた彼らは強風に被害を受けてこのような名称を与えたのだと説かれる。

(21) Lat. Pontus Euxīnus，Gk. póntos eúxeinos の古名はそれぞれ Pontus Axenus (Axīnus)，póntos áxeinos であって，これは後の呼称と全く逆の「もてなしのよくない海」という意味である。ミレトスを母市として紀元前８世紀頃より黒海沿岸に数多くの植民地が創設されるに及んで，その名称も変更を加えられた。

参考文献（訳註・補遺3）

Allières, Jacques（大高順雄訳）1992.『フランス語の形成』白水社.

Encyclopedia Britannica 1998. *Britannica CD 98. Multimedia Edition. International Version.*

Ernout, A. et Meillet, A. 1951³. *Dictionnaire étymologique de la langue latine. (Histoire des mots.)* Paris: Klincksieck.

蛭沼寿夫 1988.「ヴェネト語」『言語学大辞典』第１巻（上）．三省堂.

カエサル（近山金次訳）1964.『ガリア戦記』岩波文庫.

牧英夫 1989.『世界地名ルーツ辞典』創拓社.

Martinet, A.（三宅徳嘉訳）1972.『一般言語学要理』岩波書店.

Mayrhofer, Manfred 1956−80. *Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*. Heidelberg: Winter.

Meillet, A. et Vendryes, J. 1968⁴. *Traité de grammaire comparée des langues classiques*. Paris: Champion.

Meillet, A. 1977. *Esquisse d'une histoire de la langue latine*. Avec une bibliographie mise a jour et complétée par J. Perrot. Paris: Klincksieck.

Menge, Hermann 1984²². *Langenscheidts Grosswörterbuch. Lateinisch-Deutsch.*

Pedersen, Holger 1909. *Vergleichende Grammatik der keltischen Sprachen*. 1. Band. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Rickard, Peter（伊藤忠夫，高橋秀雄訳）1995.『フランス語史を学ぶ人のために』世界思想社.

タキトゥス（泉井久之助訳註）1979.『ゲルマーニア』岩波文庫.

（1998. 9 .18　受理）